

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

少く前に（注1）「千の風になって」という歌が人気を集めた。そこでは「死」あるいは「死生観」ということが主題になっているが、今こうした歌がヒットするということには、次のような日本社会全体に関する時代背景があるように思われる。戦後の日本社会は、経済の成長あるいは物質的な富の拡大ということをもつばら目標にして走ってきた。個人の人生にたとえ、社会全体が文字通り「若く」、「上昇、進歩、成長」という方向にひたすら坂道を登っていった。それは「生」を限りなく拡大していくということでもあり、その先にある老いや死といったことにはあまり関心を払わず、視野の外に置いてきたのである。

A、物質的な富が飽和する中で経済もセイジユク化の時代を迎えつつあり、日本社会全体がいれば「離陸」から「着陸」の方向をモサクしつつある。そして死生観の再構築ということが、日本人全体にとっての大きな課題となっているのではない。この場合、どのような死生観を持つかはもちろん一人ひとりにかかっているが、死生観というものは「時間」ということと深く関連していると私は考えている。

話の手がかりとして「人生」のイメージというものを考えてみたい。人生、つまり人が生まれ、成長し、老い、死んでいくという全体的な過程について人々がもつイメージには、さしあたり大きく二つのタイプがあるように思われる。ひとつは「①直線としての人生イメージ」であり、もうひとつは「②円環としての人生イメージ」だ。

前者の場合、人生とは基本的に「上昇、進歩する線」のようなものであり、死はその果ての「無」への落下という意味合いが強くなる。おそらく高度成長時代を駆け抜けてきた戦後の日本人にとっての人生イメージは、大方こちらに近かったと言えるのではなからうか。他方、後者のほうでは、人生とは、生まれた場所からいわば大きく弧を描いてもとの場所に戻っていくようなプロセスとして考えられる。この見方では、「生」と「死」とは同じ場所に位置することになる。

私にとって、そもそもこうした円環的な人生イメージを具体的に感じるきっかけを与えてくれたのは、③「パウンティフルへの旅」という一九八五年のアメリカ映画だった。「パウンティフル」はアメリカ南部の地名で、主演女優のジェラルディン・ペイジはこの作品により同年の（注2）アカデミー主演女優賞を受賞している。

内容を簡単に紹介すると、ペイジ演ずる主人公の高齢の女性は、夫には大分以前に先立たれ今は息子夫婦とともに町に暮らしている。自分の死がそう遠くないであろうことを意識し始めている彼女は、死ぬ前に一度だけ、生まれ育った場所であるパウンティフルを訪れたいと思うようになる。パウンティフルは遠く離れた田舎の場所であり、今ではほとんどただの草原のようになってきているところだ。彼女は、④シユウトウに計画を立てた上で、ある日こっそり家を抜け出し、長距離バスを乗り継いでパウンティフルまでの旅を「決行」することになる。

ここから先はむしろ映画をご覧いただければと思うが、「自分が生まれ育った場所を、死ぬ前にもう一度見とどきたい」という思いは、人間の心の深い部分に根ざした普遍的な願いのように思われる。このことを先の「円環としての人生イメージ」と結びつけて考えると、彼女にとってパウンティフルは、「生まれた場所」であると同時に、いわば「たましいの帰っていく場所」ともいえるべき存在としてあったのではないだろうか。

私自身は、死生観においてもっとも重要なことは、その人にとってのこうした「帰っていく場所」を見いだすことではないかと考えている。こうしたことを、時間ということの意味をさらに探るかたちで考えてみよう。

私たちは、日々の生活の中で、いわば「日常の時間」といふべき時間を生きている。⑤それは通常、「カレンダー」的な時間であり、過去から未来へとつらなる「直線」としての時間である。

しかしそうした「直線的な時間」というものは、決して絶対 α 唯一のものではなく、そうした時間のいわば根底に、それとは異なる時間の層があるとは考えられないだろうか。

たとえて言うとな次のようなことである。川や、あるいは海での水の流れを考えると、表面は速い速度で流れ、水がどんどん流れ去っている。しかしその底のほうの部分になると、流れのスピードは次第にゆったりとしたものとなり、場合によってはほとんど動かない状態であったりする。これと同じようなことが「時間」についても言えるのではないだろうか。日々刻々と、⑥瞬間、瞬間に過ぎ去り、変化していく時間。この「カレンダー的な時間」の底に、もう少し深い時間の層といふべきものが存在し、私たちの生はそうした時間の層によって支えられているとは考えられないだろうか？

私は、そうした時間の層を「深層の時間」と呼んでみたい。このように述べるとずいぶんと非科学的なことを主張しているように響くかもしれないが、たとえば（注3）宇宙物理学者で「⑦宇宙物理学者で「⑧宇宙物理学者で「⑨宇宙物理学者で「⑩宇宙物理学者で「⑪宇宙物理学者で「⑫宇宙物理学者で」とあり、人間が宇宙につけた指標のようなものにすぎないと述べている。また別の文脈では、人間が認識しているのはあくまで「人間の時間」であって、それはあくまで時間の一つに過ぎず、様々な生き物はそれぞれにおいて異なる固有の「時間」の中を生きているという見方が一般的となっている。このように⑬「直線的な時間」は決して唯一絶対のものではないのである。先に述べた「直線」

と「円環」との対比にそくして言えば、これらは並列する関係にあるというよりは、いわば時間の異なる層を示しており、もともと表層にあるのが「直線的な時間」で、その底にはカイキする円環としての時間があり、さらにその底には、根底にある「深層の時間」が存在する。

そうした「深層の時間」は、先ほど海や川の水の流れにたとえたように、もともと底にある不動の部分であり、刻々と変化していく事象の中にあつて「変わらないもの」ともいえる。そしてさらに考えていくと、そうした深層の時間は、いわば「生と死がふれあう場所」ともいえるような性格をもっているのではないだろうか。

思えば、文学作品や映画の中には「死者との再会」を描いたものがある。私にとって印象的であつたものの例を挙げると、山田太一氏の『異人たちの夏』や、ケビン・コスナーが主演したアメリカ映画の『フィールド・オブ・ドリームズ』（1990年）などがある。前者の場合、中年の主人公は、小さい頃に交通事故で亡くした両親と、生まれ育つた下町をふと訪れた時に「再会」し、ひとときの忘れがたい時間を過ごす。それは主人公にとって人生の大きな節目の時期での出来事であつた。

もちろん私たちが、亡くなった親しい人に「現実」に「再会する」ということはありえないことである。その意味で以上のような文学作品や映画における「死者との再会」は、**象徴的な表現にとどまる**。しかしそれらが人々に訴える力を持つのは、「生」はそのもともと根底のところでは「死」とつながっており、そのことに人々が意識の底で気づいているからではないだろうか。

言い換えると、私たちは「生」と「死」というものを全く接点のない対立物と考えがちであるが、生と死はむしろ連続的なものではないか。そして「深層の時間」との関連では、それは生と死がふれあうような時間の層であり、私たちの生は、深層の時間において、死とつながっているのではないだろうか。

(注1) 「千の風になつて」…秋川雅史氏によって歌われたヒット曲。

(注2) アカデミー主演女優賞…アメリカ映画芸術科学アカデミーによって、毎年、最も功績のあつた主演女優に贈られる賞。

(注3) 宇宙物理学…星や星雲のほか、宇宙空間の物質・磁場・放射線や宇宙論などを研究対象とする物理学。

(出典 広井良典「死生観と時間」)

問1 空欄A・Bにあてはめるのに適切な語を次のア～オの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア さて イ あるいは ウ だから エ ところが オ いうまでもなく

問2 波線部X「飽和する」Y「普遍的な」の意味を書きなさい。

問3 二重傍線部a、eのカタカナに相当する漢字を書きなさい。

問4 点線部α、βの漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

問5 傍線部①「直線としての人生イメージ」、②「円環としての人生イメージ」とあるが、それぞれどのような人生か。それぞれ五十字以内(句読点等も一字に含める)で具体的に説明しなさい。

問6 傍線部③「『バウンティフルへの旅』という一九八五年のアメリカ映画」を、本文のこの部分で引用した筆者の意図は何か。六十字以内(句読点等も一字に含める)で説明しなさい。

問7 傍線部④「それは通常、「カレンダー」的な時間であり」とあるが、ここでの時間は、なぜ、「カレンダー」でたとえられるのか。四十字以内(句読点等も一字に含める)で説明しなさい。

問8 傍線部⑤「『直線的な時間』は決して唯一絶対のものではないのである」と言えるのはなぜか。七十字以内(句読点等も一字に含める)で説明しなさい。

問9 傍線部⑥「象徴的」な表現」とあるが、ここでは何を「象徴」しているのか。二十字以内(句読点等も一字に含める)で答えなさい。

二次の①～⑩の言葉の意味を後のア～コの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- | | | | | | |
|---|------------------------|---|------------------------|---|----------------------|
| ① | アイデンティティ | ② | アナクロニズム | ③ | コンテキスト |
| ④ | メディア | ⑤ | モラトリアム | | |
| ⑥ | 陥穽 <small>かんせい</small> | ⑦ | 啓蒙 <small>けいもう</small> | ⑧ | 恣意 <small>しじ</small> |
| ⑨ | 羨望 <small>せんぼう</small> | ⑩ | 俯瞰 <small>ふかん</small> | | |

ア 時代錯誤。時代遅れ。

イ 人々に正しい知識を与え、教え導くこと。

ウ 媒体。特に新聞・雑誌・テレビ・ラジオなどの媒体。

エ 成長して、なお社会的な責任や義務を課せられない猶予の期間

オ 自分の思うままに振る舞う心。気ままな考え。

カ 落とし穴。わな。

キ ちらやむこと。

ク 前後の脈絡。文脈。

ケ 自己同一性。自分という存在の独自性についての自覚。

コ 高いところから見下ろすこと。全体を上から見ること。